

2020年6月24日～23日

沖縄 75 年慰霊の日

戦後 75 年、沖縄慰霊の日 地上戦犠牲者追悼、平和誓う—知事
「記憶風化させない」

時事通信 2020 年 06 月 23 日 13 時 14 分



沖縄全戦没者追悼式で平和宣言を読み上げる沖縄
県の玉城デニー知事＝23日午後、同県糸満市の平和祈念公園

沖縄は23日、太平洋戦争末期の地上戦の犠牲者を追悼する
「慰霊の日」を迎えた。沖縄戦で最後の激戦が繰り上げられた糸
満市摩文仁の平和祈念公園では、県主催の「沖縄全戦没者追悼式」
が開かれ、平和への誓いを新たにした。

戦後75年となる今年は新型コロナウイルス感染症対策とし
て、式典の規模を例年の5000人から大幅に縮小し、161人が
参加。参列者は座席の間隔を空けるなどの感染対策を取り、正
午には犠牲者の冥福を祈り、1分間の黙とうをささげた。

追悼式では、玉城デニー知事が平和宣言を読み上げた。戦争の
記憶を風化させないため、沖縄戦で得た教訓を正しく次世代に伝
え、平和を希求する「沖縄のこころ」を世界で共有することを呼
び掛けた上で、「人類の英知を結集し、核兵器の廃絶、戦争の放
棄、恒久平和の確立にまい進しなければならぬ」と訴えた。

米軍普天間飛行場（宜野湾市）の名護市辺野古への移設問題に
も言及し、「自然豊かな海や森を次の世代に残すため、今を生き
る我々世代が責任を持って考えることが重要だ」と強調した。



沖縄全戦没者追悼式で、席
の間隔を空けて黙とうする参列者＝23日午後、沖縄県糸満市の
平和祈念公園

安倍晋三首相は感染症対策の一環で参列はせず、ビデオ映像で
あいさつ。沖縄に米軍基地が集中している現状について「到底容
認できるものではない。基地負担の軽減に向け、一つひとつ確実
に結果を出していく決意だ」と述べた。

被爆地の広島、長崎両市長もビデオ映像で、世界に平和を根付
かせるよう連帯を訴えた。県立首里高校3年の高良朱香音さん
（17）は、自作の「平和の詩」を朗読。生き延びた戦争体験者
に感謝の意を表した上で、平和への決意を誓った。

沖縄では1945年4月、米軍が本島中部に上陸。多くの住民
が戦闘に巻き込まれ、軍民合わせて20万人以上が犠牲となる国
内最大の地上戦となった。

犠牲者の名を刻んだ、平和祈念公園内の「平和の礎（いしじ）」
には、今年新たに30人が追加され、刻銘者数は計24万159
3人となった。

沖縄戦体験者に「ありがとう」 記憶継承へ決意も一高3が詩朗
読・慰霊の日

時事通信 2020 年 06 月 23 日 12 時 50 分



沖縄全戦没者追悼式で、自作の詩を朗読する首里高校3年の高良
朱香音さん＝23日午後、同県糸満市の平和祈念公園

沖縄「慰霊の日」追悼式では、県立首里高校3年の高良朱香音
さん（17）が、平和の詩「あなたがあの時」を朗読した。沖縄
戦を体験した世代が戦争を語ってきた勇気や、記憶を伝えていく
使命感を詩に込めた。体験者の心に届き、若い人が発信する機会
になればと願う。

当時戦争をよく理解していなかった体験者の視点を「あなた」
に投影した。小学校で聴いた講話などから、悲惨な体験に思いを
寄せた。亡くなった首里高校生たちの写真を見学し、自分の身を
当時に置き換え、教室にいる友達や自分が死ぬことも想像した。

戦争を経験した世代が減っていく中、語ってきたことへの感謝
も込めた。「あなたがあの時／勇気を振り絞って語ってくれたお
かげで／私たちは 知った」「ありがとう」

同時に、若い人がいかに記憶を継承していけるのかを考えてい
る。友達同士でも戦争や平和について話し合うことはなく、高良
さんもこれまでは「受信」する立場だったが、自分から発信し、
身近な人や若い人も話しやすくなればと考えた。

「戦争の悲惨な世の中を生き抜いた思いはとても大きなものだ
と思う」と、75年の節目に平和を伝える使命感を感じている。
詩にも決意を盛り込んだ。「あなたが見つめた希望の光／私は消
さない 消させない」。

「沖縄戦体験者の心、少しでも癒やせたら」 平和の詩「あなた
があの時」朗読の高良朱香音さん

毎日新聞 2020 年 6 月 23 日 15 時 22 分（最終更新 6 月 23 日 19
時 51 分）



沖縄全戦没者追悼式で平和の詩を朗読する高
良朱香音さん＝沖縄県糸満市の平和祈念公園で 2020 年 6 月 23
日午後 0 時 20 分、徳野仁子撮影

沖縄県糸満市の平和祈念公園で 23 日に営まれた沖縄全戦没者
追悼式で、県立首里高校（那覇市）の 3 年、高良朱香音（たから
あかね）さん（17）が平和の詩「あなたがあの時」を朗読した。
県民の 4 人に 1 人が亡くなったとされる地上戦の中、命をつな

ぎ、戦後の沖縄を復興させた先人たちへの感謝の思いを込めて、自作の詩を読み上げた。

高良さんが1週間をかけて書いた詩は、県内の小中高校、特別支援学校の児童・生徒が応募した1119点の中から選ばれた。

高良さんは高校1年の時に沖縄戦で住民らが避難した糸満市の壕（ごう）を訪れた。詩は、その時に壕の中で感じたことと、当時の子供たちが戦争に巻き込まれていった経過を重ね合わせる形でつづった。

<あなたが青春を奪われたあの時 あなたはもうボロボロ
家族もない 食べ物もない ただ真っ暗なこの壕の中で あなたの見た光は、幻となって消えた>

首里高の前身、県立第一中学校は、沖縄戦で鉄血勤皇隊として戦場に学徒動員された生徒153人が亡くなったとされる。高良さんは犠牲になった先輩たちの写真を見て、「もし自分がこの時代に生きていれば、今、一緒にいる友達も亡くなっていたかもしれない」と戦争の恐ろしさを実感した。だからこそ、「同世代の人ともっと平和や戦争について話し合いたい」と思う。

<ありがとう あなたがあの時 あの人を助けてくれたおかげで 私は今 ここにいる あなたがあの時 前を見続けてくれたおかげで この島は今 ここにある>

戦後75年。苦難を乗り越え、凄惨（せいさん）な記憶を語り継いできてくれた沖縄戦体験者の心が「少しでも癒やされてくれれば」との思いで詩を読んだ高良さん。「私は平和な世界を創造する」。沖縄に生きた「あなた」に強く誓った。

高良さんは朗読後、「平和は当たり前のことではないと思った。もっと強く平和を求められるようになりたい」と笑顔で語った。

【遠藤孝康、飯田憲】

沖縄慰霊の日 高良朱香音さんの平和の詩「あなたがあの時」全文

毎日新聞 2020年6月23日 10時05分(最終更新 6月23日 21時27分)



沖縄全戦没者追悼式で平和の詩を朗読する高良朱香音さん＝沖縄県糸満市の平和祈念公園で2020年6月23日午後0時19分、徳野仁子撮影

23日に行われる「沖縄慰霊の日」で、沖縄県立首里高校3年の高良朱香音（たから・あかね）さんが「平和の詩」を朗読した。平和の詩「あなたがあの時」の全文は以下の通り。

あなたがあの時

沖縄県立首里高校3年 高良朱香音

「懐中電灯を消してください」

一つ、また一つ光が消えていく

真っ暗になったその場所は

まだ昼間だというのに

あまりにも暗い

少し湿った空気を感じながら

私はあの時を想像する

あなたがまだ一人で歩けなかったあの時

あなたの兄は人を殺すことを習った

あなたの姉は学校へ行けなくなった

あなたが走れるようになったあの時

あなたが駆け回るはずだった野原は

真っ赤っか 友だちなんて誰もいない

あなたが青春を奪われたあの時

あなたはもうボロボロ

家族もない 食べ物もない

ただ真っ暗なこの壕の中で

あなたの見た光は、幻となって消えた。

「はい、ではつけていいですよ」

一つ、また一つ光が増えていく

照らされたその場所は

もう真っ暗ではないというのに

あまりにも暗い

体中にじんわりとかく汗を感じながら

私はあの時を想像する

あなたが声を上げて泣けなかったあの時

あなたの母はあなたを殺さずに済んだ

あなたは生き延びた

あなたが少女に白旗を持たせたあの時

彼女は真っ直ぐに旗を掲げた

少女は助かった

ありがとう

あなたがあの時

あの人を助けてくれたおかげで

私は今 ここにいる

あなたがあの時

前を見続けてくれたおかげで

この島は今 ここにある

あなたがあの時

勇気を振り絞って語ってくれたおかげで

私たちは 知った

永遠に解かれることのない戦争の呪いを

決して失われてはいけない平和の尊さを

ありがとう

「頭、気をつけてね」

外の光が私を包む

真っ暗闇のあの時

あなたが見つめた希望の光

私は消さない 消させない

梅雨晴れの午後の光を感じながら

私は平和な世界を創造する

あなたがあの時

私を見つめたまっすぐな視線

未来に向けた穏やかな横顔を

私は忘れない

平和を求める仲間として

沖縄戦終結75年、不戦誓う 「慰霊の日」犠牲者追悼

2020/6/23 13:18 (JST)共同通信社



沖縄全戦没者追悼式で、黙とうする沖縄県の玉城デニー知事（左端）ら参列者＝23日正午、沖縄県糸満市の平和祈念公園

沖縄県は23日、太平洋戦争末期の沖縄戦で命を落とした20万人超を悼む「慰霊の日」を迎えた。75年前のこの日、旧日本軍が組織的戦闘を終えたとされる。最後の激戦地、糸満市摩文仁の平和祈念公園で、県などが主催する沖縄全戦没者追悼式が営まれた。玉城デニー知事は平和宣言で、人類史上他に類を見ない惨禍を経験した被爆地の広島、長崎と「平和を願う心を共有する」と訴え、不戦を誓った。

今年はコロナの影響で規模を縮小し、安倍首相の招待は見送った。追悼式では遺族ら約160人が感染防止のため間隔を空けて着席し、正午に1分間黙とうをささげた。会場周囲にも静かに祈る人の姿があった。



沖縄戦犠牲者の氏名が刻まれた「平和の礎」に手を合わせる女性＝23日午前、沖縄県糸満市の平和祈念公園

辺野古、知事は政府批判控える 「沖縄人の財産」、慰霊の日

2020/6/23 20:37 (JST)6/23 20:47 (JST)updated 共同通信社



沖縄戦の組織的戦闘が終結してから75年を迎え、犠牲となった親族の氏名が刻まれた「平和の礎」を訪れた遺族＝23日午後、沖縄県糸満市の平和祈念公園

太平洋戦争末期の沖縄戦で組織的戦闘が終結してから75年の23日、沖縄県糸満市摩文仁の平和祈念公園で沖縄全戦没者追悼式が営まれた。玉城知事は平和宣言で、米軍普天間飛行場の移設先、名護市辺野古沿岸部に埋め立てを進める政府を直接批判せず、辺野古の海は「ウチナーンチュ（沖縄人）の財産」と述べるにとどめた。安倍首相も辺野古に触れなかった。

政府との対決色を薄めた格好だが、知事周辺は、新型コロナウイルスの感染拡大防止のため首相の招待が見送られ「辺野古阻止を訴える相手がいなかっただけだ」と説明。玉城氏は式典後「辺野古新基地建設に反対する気持ちは全く変わらない」と強調した。

「戦争さえなければ」「せめて手を」「平和の礎」で遺族が祈り—沖縄慰霊の日

時事通信 2020年06月23日11時24分



「平和の礎（いしじ）」の前で、手を合わ

せる親子3世代＝23日午前、沖縄県糸満市の平和祈念公園

「慰霊の日」を迎えた23日朝、沖縄県糸満市摩文仁の追悼式会場そばの「平和の礎」には、時折雨が降る中でも多くの遺族が各地から訪れ、不戦を誓い平和への祈りをささげた。

親子で訪れた同市の金城覚さん（47）は、祖母から叔父が沖縄戦のために1歳で亡くなったと聞いた。「戦争さえなければ死ぬことはなかった。戦争のせいではない」と訴えた祖母の思いを継ぎ、毎年平和の礎で子どもに当時の状況を伝えている。「子どもは今は聞くだけだけれど、親になれば分かるのではないかと期待する。



「平和の礎（いしじ）」を訪れ、お茶を手向

ける金城覚さん（左）と子どもたち＝23日午前、沖縄県糸満市の平和祈念公園

浦添市から訪れた伊志嶺勝代さん（83）は、故郷の伊良部島（宮古島市）から出征した父の記憶がほとんどない。「私は台湾に疎開していたが、父は帰ってこなかった。せめて手を合わせた」と寂しそうに水を供えた。

那覇市の桑江常輝さん（91）は、那覇で空襲に遭い、本島北部に避難したが、兄が糸満市で亡くなった。避難先にも米軍が迫り、「自分で死んだ方が良い」と言ったが、父に「死ぬのはいつでもできる」と諭され、思いとどまった。一緒に平和の礎を訪れた孫の野原もなさん（16）は「だから私がいるんだよね」と話し掛けた。



「平和の礎（いしじ）」の前で、戦争体験

を語る桑江常輝さん＝23日午前、沖縄県糸満市の平和祈念公園

名護市の岸本憲三さん（78）は3歳の時に沖縄戦を経験した。父は防衛召集され、首里で亡くなったと聞いたが、詳細な場所は分からないという。岸本さんは約30年前から、今も野に散らばる無名の遺骨収集を続け、「おやじじゃないかと思いつながら集めている」。平和の礎には孫3人と訪れ、父に「子どもたちを見守ってください」と祈った。

南風原町の伊志嶺真人さん（49）は、伯父をマラリアで亡くした。疎開して生き延びた両親は、慰霊に訪れる体力も衰えた。今年は小学生の息子を初めて連れ、「両親の分まで手を合わせた。おやじたちの話を子供に引き継いでいきたい」と誓った。

コロナ禍で迎えた沖縄・慰霊の日 追悼式は規模を縮小
朝日新聞デジタル藤原慎一 2020年6月23日21時46分



沖縄全戦没者追悼式で黙禱（もくとう）する

沖縄県の玉城デニー知事=2020年6月23日正午、沖縄県糸満市、加藤諒撮影



日米合わせて約20万人が亡くなった太平洋戦争末期の沖縄戦から75年。沖縄は23日、犠牲者を悼む「慰霊の日」を迎えた。節目の年は新型コロナウイルスの影響で、県内各地の追悼行事は相次いで中止や縮小を余儀なくされた。そうした中、玉城デニー知事は追悼式での平和宣言で、戦争の記憶を風化させない取り組みを誓った。

1945年3月末、米軍の慶良間諸島上陸で始まった地上戦は、6月23日に日本軍の組織的な戦闘が終わったとされる。ただ、その後も局地的な戦闘は続き、多くの住民が命を落とした。生活の場が戦場となり、防衛隊や学徒隊など現地召集の軍人・軍属を含めた沖縄県出身の犠牲者は12万人以上に及んだ。

軍民が入り乱れて追い詰められた最後の激戦地、糸満市摩文仁（まぶに）の県平和祈念公園では、県主催の沖縄全戦没者追悼式が開かれたが、新型コロナウイルスの感染拡大で、昨年5100人だった参加者は県内関係者のみ約160人。座席は2メートル間隔に置かれた。

正午に合わせて1分間の黙禱（もくとう）の後、玉城知事は平和宣言で、「戦争を風化させないための道りを真摯（しんし）に探（さぐ）り、この島が平和交流の拠点となるべく国際平和の実現に貢献する役割を果たしていく」と決意を表した。

一方、沖縄になお7割が集中す…
残り：387文字／全文：919文字

首相「首里城復元も全力」 沖縄全戦没者追悼式あいさつ 朝日新聞デジタル 2020年6月23日 15時18分

23日に開かれた沖縄全戦没者追悼式にビデオ収録で寄せた安倍晋三首相のあいさつの要旨は次のとおり。

沖縄戦において、戦場に斃（たお）れた御霊（みたま）、戦禍に遭われ亡くなられた御霊に向かい、謹んで哀悼の誠を捧げます。

今日私たちが享受している平和と繁栄は、沖縄の方々の筆舌に尽くしがたい苦しみ、苦難の歴史の上にあることを、私たちは決して忘れません。沖縄戦から75年を迎えた今、そのことを改めて噛（か）み締めながら、静かに頭（こうべ）を垂れたいと思います。

我が国は、戦後一貫して、平和を重んじる国家として、歩みを進めてきました。戦争の惨禍を二度と繰り返さない。この決然たる誓いを貫き、平和で、希望に満ち溢（あふ）れる世の中を實現する。そのことに今後も不断の努力を重ねていくことを、改めて、御霊にお誓いいたします。

沖縄の方々には、永きにわたり、米軍基地の集中による大きな負担を担っていただいております。この現状は、到底は認（め）できるものではありません。「できることはすべて行う」との方針の下、沖縄の基地負担軽減に全力を尽くしてまいります。

美しい自然に恵まれ、アジアの玄関口に位置する沖縄の優位性と潜在力は計り知れませんが、本年3月には、念願の那覇空港第2滑走路の供用も開始しました。現下の新型コロナウイルス感染症による危機を乗り越え、沖縄が「万国津梁（ばんこくしんりょう）」として世界の架け橋となるよう、沖縄の振興をしっかりと前に進めてまいります。また、沖縄の皆さんの誇りとも言える、首里城の復元についても、政府一丸となって全力で取り組んでまいります。

沖縄慰霊の日「全戦没者追悼式」始まる 新型コロナで規模縮小 毎日新聞 2020年6月23日 12時02分(最終更新 6月23日 12時12分)



間隔を開けて沖縄全戦没者追悼式に参列する人々=沖縄県糸満市で2020年6月23日午前11時55分、徳野仁子撮影

太平洋戦争末期の沖縄戦などの犠牲者を追悼する「沖縄慰霊の日」の23日、最後の激戦地となった沖縄県糸満市摩文仁（まぶに）の平和祈念公園で県と県議会主催の「沖縄全戦没者追悼式」が始まった。県民の4人に1人が亡くなったとされる日米両軍の凄惨（せいさん）な地上戦から75年。正午に1分間黙とうし、玉城（たまき）デニー知事が「平和宣言」を読み上げる。

新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、県は今年度の追悼式の規模を縮小した。例年は約350人を招待していたが、約200人に絞った。安倍晋三首相や衆参両院議長、関係閣僚は参列せず、安倍首相のあいさつは事前収録したビデオメッセージが会場で放映される。首相は2004年から毎年参列していた。

県は戦後75年の節目となる追悼式に、第二次世界大戦中に原爆を投下された広島、長崎の両市長、国連代表の招待も計画していた。しかし、いずれも新型コロナウイルスの感染拡大を受けて招待を見合わせ、追悼式では、広島市の松井一実市長、長崎市の田上富久市長、国連の中満泉事務次長（軍縮担当上級代表）のビデオメッセージが流される。【遠藤孝康】

沖縄戦終結75年「慰霊の日」 平和への誓い新た 日経新聞 2020/6/23 9:33 (2020/6/23 13:45更新)



沖縄戦犠牲者の氏名が刻まれた「平和の礎」に手を合わせる家族(23日午前、沖縄県糸満市の平和祈念公園)=共同

沖縄は23日、太平洋戦争末期の沖縄戦で犠牲になった人を悼む

「慰霊の日」を迎えた。75年前のこの日、多数の住民を巻き込んだ地上戦の末、旧日本軍の組織的な戦闘が終結したとされる。最後の激戦地、糸満市摩文仁の平和祈念公園では県主催の「沖縄全戦没者追悼式」が開かれ、参列者は平和への誓いを新たに。県は新型コロナウイルス感染防止のため、例年より追悼式の規模を縮小した。式には遺族代表や玉城デニー知事が参列し、正午に犠牲者に黙とうをささげた。参列者は約160人で、安倍晋三首相の招待も見送った。

玉城知事は平和宣言で米軍普天間基地（宜野湾市）の名護市辺野古への移設反対の立場から「我々世代が未来を見据え、責任を持つことが重要」と訴えた。

安倍首相はビデオメッセージで「基地集中の現状は、到底是認できるものではない。政府として、基地負担の軽減に向け、一つ一つ確実に、結果を出していく」と決意を述べた。

今年は戦後75年の節目のため、被爆地の広島、長崎の両市長や国連の代表者を招く予定だったが、招待を見送る代わりにビデオメッセージを寄せてもらった。県立首里高校3年の高良朱香音さん（17）は平和の詩を朗読した。

国籍や軍民を問わず、沖縄戦の戦没者名を刻んだ石碑「平和の礎（いしじ）」には30人が追加刻銘され、2020年度の総数は24万1593人となった。

1972年まで米軍統治下に置かれた沖縄では、強制的な土地収用で米軍基地が建設された。玉城知事は政府が進める米軍普天間基地の名護市辺野古移設に反対しており、政府との対決姿勢を続けている。19年2月の辺野古移設を巡る県民投票では「反対」が多数を占めた。その後の国政選挙でも移設反対派が勝利している。沖縄戦は1945年3月26日、米軍が沖縄・慶良間諸島に上陸して始まり、同年6月23日、旧日本軍の司令官が自決し組織的戦闘が終結したとされる。県によると、一般住民の犠牲者は推計約9万4千人に上る。

52年4月28日のサンフランシスコ講和条約の発効に伴い日本は主権を回復したが、沖縄は日本本土から分離。米軍施政権下に置かれた後に、72年5月15日に本土復帰した。



「平和の礎」を見つめる中学生。沖縄戦で曾祖父を亡くした（23日午前、沖縄県糸満市の平和祈念公園）=共同

「日本兵の方が恐ろしかった」 教育の重要性強調—語り部の89歳大城さん・沖縄

時事通信 2020年06月23日 20時34分



アバタガマを見詰める大城藤六さん=17

日、沖縄県糸満市

太平洋戦争末期、激戦地となった沖縄県糸満市。住民の多くは

「ガマ」と呼ばれる洞窟内に逃げ込んだが、追い込まれた日本兵が住民を追い出し、殺害することもあった。語り部を続ける大城藤六さん（89）は「米兵より日本兵の方が恐ろしかった」と振り返り、戦争の真実を伝える教育の重要性を強調する。

1945年5月、「鉄の暴風」と呼ばれた米軍の砲撃が激しさを増す中、同市真栄平に住んでいた大城さんは親族27人や同じ集落の住民とともに大洞窟「アバタガマ」に避難していた。しかし、撤退してくる友軍を迎えるためとして、日本兵からガマを出るよう求められた。軍刀をガチャガチャと鳴らし、威圧的に迫る将校が怖かった。



投降直前に身を潜めていた排水溝を指し

示す大城藤六さん=17日、沖縄県糸満市

親族らと大きな石でできた古い墓の中に移ったが、そこに砲弾が命中。14人が即死し、大城さんも膝を負傷した。その後防空壕（ごう）に逃げたものの6月22日、目前に米軍の戦車が迫った。一族の最年長だった伯父は、持っていた手榴弾による自決を提案。戦時中の教育で、投降すれば殺されると皆が信じていたからだ。反対した大城さんは、男3人で防空壕を脱出し、排水溝に身を潜めた。

大城さんは同24日、投降した。先導してくれたのは米国で暮らした経験を持つ集落の男性医師。「出てこい」と呼び掛ける米軍が決して残虐ではないことを説明し、捕虜となるよう勧めた。実際、投降後米兵は丁寧に接してくれた。一方で防空壕に残った10人ほどの親族は投降に応じず、投げ入れられた発煙弾の煙を吸い込み4人が亡くなった。



沖縄県糸満市真栄平の集落を歩く大城藤六さん。

米軍の砲弾から身を守るため、数十人の住民が奥の路地に隠れたが、戦後遺体となって見つかった=17日、沖縄県糸満市

日本兵の残虐さがくぜんとすることも。自宅から3軒隣では、家主の男性が日本兵に殺された。防空壕から出るよう求められ、方言で意思疎通ができないと刀で首をはねられたと目撃者から聞いた。「やはり日本軍は住民を守らない」と思いを強くした。

戦後は糸満市で中学校の教師に。平和の在り方をより深く考えようと、2004年からは講習を受けて戦争体験の語り部を始めた。平和祈念公園にある「平和の礎」に戦没者の氏名を刻む事業や、県史編さんのための聞き取り調査にも加わった。

「日本は負けない神の国と教わり、皆が当たり前信じていた。ばかげていた」と振り返る。「虐殺やガマの追い出しなどの事実を教科書に載せ、悪いことは反省しないといけない」と訴えた。

「平和の象徴」復元願う 首里城炎上2度目撃の吉嶺さん—沖縄慰霊の日

時事通信 2020年06月23日 07時08分



首里城の守礼門を前に話す吉嶺全一さん＝

3日午後、那覇市

昨年10月末の火災で、建物の大半が崩れ落ちた那覇市の首里城。米軍の攻撃による沖縄戦中の炎上と、2度にわたって火災を目撃した男性がいる。同市首里金城町に住む吉嶺全一さん(87)。「首里城は戦のために造られたのではない平和の象徴」と話し、早期の復元を願っている。

太平洋戦争中、吉嶺さんは首里城内にあった小学校に通い、城は友達との遊び場だった。12歳だった1945年4月、首里城は米軍による砲撃で炎に包まれ、夕方から明け方まで半日近く燃え続けた。自宅周辺が激しい攻撃を受けたこともあり、吉嶺さんは当時興味も湧かなかつたが、祖母は「うぐしくがめーとーん(お城が燃えている)」と涙を流していた。



元米兵と一緒にの写真を手にして話す吉嶺全一

さん＝3日午後、那覇市

その後、家族や近所の人とともに約14キロ離れた糸満市摩文仁まで避難。しかし、そこでは戦車や艦砲射撃、空からの砲弾が雨のように降り、住民が泣き叫び、助けを求める声であふれていた。隠れた岩の目の前では日本兵が米軍の砲弾に焼かれて悲鳴を上げ、外に出てみると灰になっていた。

米国統治下となった戦後は首里に戻り、通信教育で英語を学び、募集が盛んだった米軍基地で働いた。米兵と会話することで「人間には敵も味方もないと分かった。大きな収穫だった」と振り返る。その後、航空会社や旅行代理店など米兵と関わる仕事を続けた。



元米兵から見せられた「ジャップ・ハンティング・ライセンス(日本人狩猟許可証)」。絶滅まで有効と記載されている＝3日午後、那覇市

沖縄戦に参加した元米兵との交流を始めたのは85年、元米兵らが摩文仁で行われた慰霊祭に出席したのがきっかけ。吉嶺さんは同行し、戦地を案内してその後も面会を重ねたが、戦争中に軍が与えたという「ジャップ・ハンティング・ライセンス(日本人狩猟許可証)」を見せられた時には衝撃を受けた。「ライセンスがあったから無差別に撃ち殺した。みんなが狂っていた。悪いのは戦争だ」と強調する。

交流を機に、平和ガイドとして戦争体験の語り部も始めた。今では祖母が燃える首里城に涙を流した理由がよく分かるという。「戦のためではない平和の象徴として誇りにしとった。心の支えだったんだろう」。祖母の思いを胸に、吉嶺さんは今後も語り続

け、首里城が復元されるのを見届けるつもりだ。

「人類が二度と経験することないように」非戦の決意新たに

沖縄慰霊の日

毎日新聞 2020年6月23日 20時56分(最終更新 6月23日 20時56分)

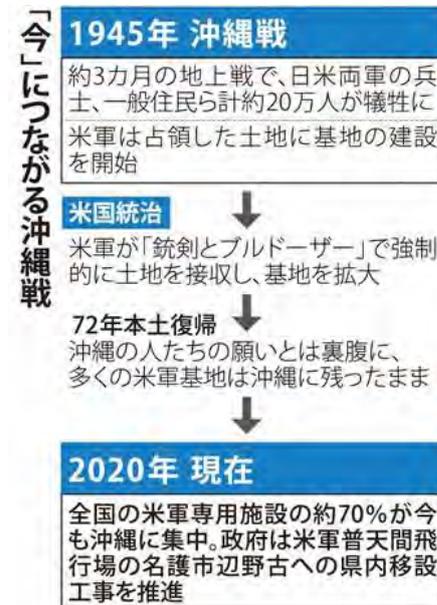


ひめゆり学徒隊の慰霊式で、通ってい

た学校の校歌を歌う元学徒隊の島袋淑子さん(中央)ら参列者＝沖縄県糸満市で2020年6月23日午前11時38分、津村豊和撮影

沖縄は23日、住民を巻き込んだ地上戦となった沖縄戦の犠牲者らを悼む「慰霊の日」を迎えた。最後の激戦地となった沖縄県糸満市摩文仁(まぶに)の平和祈念公園では、県と県議会主催の「沖縄全戦没者追悼式」があった。戦後75年の節目に合わせ、第二次世界大戦で原爆を投下された広島、長崎両市長もメッセージを寄せ、沖縄県の玉城(たまき)デニー知事は平和宣言で「人類史上他(た)に類を見ない惨禍を経験したヒロシマ・ナガサキと平和を願う心を共有し、人類が二度と『黒い雨』や『鉄の暴風』を経験することがないように、心に『平和の火』をともし、尊い誓いを守り続ける決意を新たにすると述べた。

追悼式は新型コロナウイルスの感染拡大防止のため、規模を縮小。2004年から毎年参列していた首相や、戦後75年で予定していた広島、長崎両市長、国連代表の招待は見合わせた。約160人が参列し、正午に1分間黙とうした。



「今」につながる沖縄戦

玉城知事は平和宣言で、沖縄戦の教訓を次世代に伝えていく決意を示し、「忌まわしい戦争の記憶を風化させない」と誓った。

そのうえで沖縄の過重な米軍基地負担に触れ、「戦後75年を経た現在も米軍専用施設の約70・3%が集中し、県民生活に多大な影響を及ぼしている」と指摘。政府が進める米軍普天間飛行場(宜野湾市)の名護市辺野古への県内移設については「辺野古・

大浦湾周辺の海は絶滅危惧種を含む5300種以上の生物が生息している。自然豊かな海を次の世代に残していくために、我々世代が未来を見据え、責任を持って考えることが重要だ」と述べた。

玉城知事は就任後初となった19年の平和宣言では「辺野古移設断念を強く求める」と言及したが、今年は直接的な批判は避けた。

一方、安倍晋三首相は事前収録したビデオメッセージであいさつした。「沖縄の方々には永きにわたり、米軍基地の集中による大きな負担を担っていただいている。基地負担の軽減に向け、一つ一つ確実に結果を出していく決意だ」と強調したが、辺野古移設には今年も触れなかった。

長崎市の田上富久市長はビデオメッセージで「沖縄と広島、長崎の経験は戦争が生み出したものだ。沖縄と被爆地はともに学びながら、戦争の記憶を伝え続け、平和の文化を社会に根付かせていきましょう」と呼びかけた。広島市の松井一実市長は「戦争や核兵器のない状態こそがあるべき姿だということを世界の共通の価値観にしていかなければならない」と強調し、国連の中満泉事務次長（軍縮担当上級代表）もメッセージを寄せた。

玉城知事は追悼式後、報道陣の取材に「表現は少し変えたが、辺野古新基地建設に反対する気持ちは全く変わっていない」と話した。【遠藤孝康】

逃げ場所を日本兵に奪われ母失う 「僕らが黙っていたら日本は戦争繰り返す」 沖縄慰霊の日

毎日新聞 2020年6月23日 21時44分(最終更新 6月23日 21時44分)



米軍の攻撃から逃げた末に母が亡くなった森を訪れた新里浩さん＝沖縄県糸満市で2020年6月23日午後3時13分、津村豊和撮影

「さったるむん」。そう言い残して、母はゆっくりと前に倒れた。那覇市の新里浩（しんざとひろし）さん（81）は沖縄戦で3カ月逃げた末に両親を失った。米軍の砲弾の破片が脇腹に刺さり、沖縄の言葉で「やられた」とつぶやいて逝った母カマドさん。日本軍による組織的戦闘が終わったとされる日の3日前だった。新里さんは23日、母が亡くなった糸満市山城（やまぐすく）の現場を訪れた。「雰囲気は全く変わってしまった」。75年の歳月に思いをはせ、「戦争は地獄だった。誰もが望んだものではなかった」と手を合わせた。

新里さんは当時6歳。両親と兄2人、姉妹の7人家族で首里（現那覇市）に暮らしていた。首里城の地下壕（ごう）には日本陸軍第32軍の司令部があり、近所でも馬に乗った将校の姿をよく見かけた。「日本は絶対に戦争に勝つ」。父康清（こうせい）さんはそう強調していたが、1945年4月1日に米軍が沖縄本島中部に上陸する直前に首里も空襲が激しくなり、一家で南へと逃げることになった。



「母の死」と題して新里浩さんが描いた絵。沖縄戦で母カマドさんに砲弾の破片が当たって亡くなった場面を描いた。左上で、手を突いてうつむくのが新里さん。母の表情は描けなかった＝沖縄県平和祈念資料館提供

頼るあてはなかった。沖縄特有の大きな「亀甲墓（かめこうばか）」に逃げ込んだが、「軍が使う」と日本兵に追い出された。夜、米軍が照明弾を上げると辺りが一瞬明るくなった。走り出すと追いかけるように激しい砲撃が始まった。いつのまにか靴はなくなり裸足に。足の裏に砲弾の破片が刺さっても背負ってくれる人はおらず、兄の手を必死で握って逃げた。「いつ死ぬか命の保証はない。恐怖だけだった」

周りの人は次々と米軍の攻撃によって命を落とした。ある集落で居合わせた同い年の幼い女の子も、避難した小屋で隣で寝ていたはずの女性も。あまりの極限状態に悲しみはなかった。

6月20日の朝、一家は沖縄本島南端の糸満にまで来ていた。壕を見つけて父が入ろうとすると、そこにいた日本兵が刀を振り上げた。「よそへ行け。たたき斬るぞ」。再び逃げ場所をなくし、仕方なく道沿いのギンネムの木陰に腰を下ろした。そこで、さく裂した砲弾の破片がカマドさんを直撃した。



「壕に入るのを拒否されて」と題して新里浩さんが描いた絵。地上戦が始まって3カ月の間、戦場を逃げ惑った体験が場面ごとに描かれている＝沖縄県平和祈念資料館提供

「しっかりと母の母でした。その日の朝に僕らの服を新しいものに着替えさせてくれた」。しばらくは逃げるのも忘れて、皆で泣き叫んだ。姉がうつぶせに倒れた母から胸に抱いていた妹を引っ張り出し、亡きがらをそのままにまた逃げた。米軍に捕らえられたのは翌日。送られた沖縄本島北部の収容所で6月末、父も体調を崩して亡くなった。

戦後、孤児となった新里さんたちは親戚の家を転々とした。小学校のクラスで両親がいないのは自分だけ。三者面談や授業参観があるたびに、嫌な思いをした。「将来の夢も何もなく、教室の端で縮こまっていた」。会社勤めをしたり、製菓業を営んだりして、戦後を必死に生きてきた。

逃げ場所を日本兵に奪われ、幾つもの死体を踏み越え、「鉄の暴風」から必死に逃げたあの3カ月を忘れることができない。15年前、「沖縄戦の絵」を収集する沖縄県とNHKの企画を知り、自らの足取りを場面ごとに描いた。「戦争がいかにも地獄か。僕らが黙っていたら戦争世代はいなくなり、日本は戦争を繰り返す」

今も全国の米軍専用施設の7割が集中する沖縄。政府は沖縄の反対を押し切って、米軍普天間飛行場の県内移設を進める。新里さんには、その姿勢が75年前、沖縄を本土防衛の「捨て石」とした、かつての国の姿とも重なる。「政府は本当に、沖縄も日本だと思っているのだろうか」【竹内望】

「慰霊の日前後はニュース多いが、普段から考えてこそその平和だ」 沖縄慰霊の日

毎日新聞 2020年6月23日 21時41分(最終更新 6月23日 21時41分)



時折雨が激しく降る中、平和の礎を訪れ犠牲者を悼む人たち＝沖縄県糸満市の平和祈念公園で 2020年6月23日午前9時19分、徳野仁子撮影

沖縄戦などの犠牲者を悼む「慰霊の日」の23日、最後の激戦地となった沖縄県糸満市摩文仁(まぶに)の平和祈念公園には多くの遺族らが訪れ、「平和の礎(いしじ)」に刻まれた大切な家族や友人らの名前を指でなぞったり、手を合わせたりして、冥福を祈った。

沖縄市の伊佐眞祐(しんゆう)さん(85)は母と姉、弟を沖縄戦で亡くした。那覇市にあった親戚宅で食事中、近くに爆弾が落ち、別れの言葉も言えないまま、二手に分かれて避難。父と伊佐さんらは生き残ったが、母らはどこで亡くなったのかも分からない。「死体を踏んで逃げた。戦争でいいことは一つもない」。戦後は生活のために米軍基地で働いたが、「本当は基地には反対」といい、「山口や秋田ではイージス・アショアの配備が停止されたのに、なぜ沖縄では辺野古に新たな基地をつくるのか」と憤った。

沖縄戦で祖母と叔母を亡くした名護市の玉城充博(たましろみつひろ)さん(55)は「慰霊の日に感じたことを大切にしてほしい」と長男佑真(ゆうしん)さん(11)＝小学6年＝と長女百恵佳(もえか)さん(10)＝小学5年＝を連れてきた。佑真さんは「戦争の爪痕は心にも残ると思うようになった」、百恵佳さんは「慰霊の日の前後は沖縄戦を考えるニュースが多いが、普段から考えてこそその平和なんだと思う」と話した。

糸満市米須(こめす)の「魂魄(こんぱく)の塔」にも朝から遺族らが訪れた。塔は終戦直後の1946年2月、周辺で野ざらしになっていた犠牲者の遺骨を納めるために作られた。

那覇市の高校教諭、大森悦子さん(46)は、自身と同様に教員だった祖父が糸満市の壕(ごう)で米軍の攻撃を受け、亡くなった。「祖父は当時の教育をどんな風に思っていたのだろうと考えてしまう。75年がたち、生徒たちに沖縄戦のことを現実と実感させるのが難しいが、身近な祖父母から改めて話を聞いてもらうなど工夫して伝えていきたい」と話した。【竹内望、飯田憲、遠藤孝康】

非戦への誓い新たに ひめゆり慰霊祭、コロナで規模縮小も 沖縄慰霊の日



ひめゆり学徒隊の慰霊式で、通って

いた学校の校歌を歌う元学徒隊の島袋淑子さん(中央)ら参列者＝沖縄県糸満市で 2020年6月23日午前11時38分、津村豊和撮影

「沖縄慰霊の日」の23日、沖縄戦に傷病兵の看護要員として動員され、生徒や教師計136人が命を落とした「ひめゆり学徒隊」の慰霊祭が、沖縄県糸満市伊原の「ひめゆりの塔」の前であった。新型コロナウイルスの感染防止で規模が縮小される中、参列者約20人は犠牲者の冥福を祈るとともに、非戦への誓いを新たにした。

式典では、元学徒たちが卒業式で歌うはずだった「別れの曲(うた)」の歌声が響くと、涙をぬぐう参列者の姿もあった。元学徒で「ひめゆり平和祈念資料館」の前館長、島袋淑子(しまぶくろよしこ)さん(92)は「学友を失い、自分だけ生き延びたという負い目は消えない。でも、ここに来るとみんなに会えるから、沖縄戦を語り継ぐことができた」と声を詰まらせた。

島袋さんの後を継いだ普天間朝佳(ふてんまちょうけい)館長(60)は「戦争を経験していない世代に対し、学徒隊にどう関心を持ってもらい、伝え続けていくかが課題。高齢化が進む体験者の思いにも応えたい」と語った。

ひめゆり学徒隊は、沖縄師範学校女子部と県立第一高等女学校の教師・生徒240人が地上戦に動員され、136人が亡くなった。塔の近くに建つ資料館は同窓生が中心となって1989年6月23日に開館し、沖縄戦を生き延びた元学徒が館内外で体験を語り続けてきた。資料館は2021年4月12日に展示内容を刷新するリニューアルオープンを予定している。【飯田憲】

「戦争風化させぬ」遺族ら決意新た 沖縄戦終結75年

日経新聞 2020/6/23 18:21



沖縄全戦没者追悼式の会場で、孫

と献花し手を合わせる女性(23日午後、沖縄県糸満市の平和祈念公園)＝共同

沖縄県は23日、太平洋戦争末期の地上戦で組織的な戦闘が終わったとされる「慰霊の日」を迎えた。新型コロナウイルス感染防止のため県主催の「沖縄全戦没者追悼式」は規模を縮小。安倍晋三首相らの招待も見送られた。それでも会場の平和祈念公園(糸満市摩文仁)では多くの人々が犠牲者を悼み、記憶の継承を誓った。

午前 11 時 50 分に始まった式典には、遺族代表や玉城デニー知事ら約 160 人が参列。正午に犠牲者に黙とうをささげた。例年は 5 千人規模で行われるが、この日は広島、長崎両市長らの招待も見送りとなった。会場には「他の人と十分な距離を取ってください」との看板が立てられ、参列者は検温後に会場入りした。



沖縄全戦没者追悼式で、献花を終えた沖

縄県の玉城デニー知事（右）（23 日午後、沖縄県糸満市の平和祈念公園）=共同

玉城氏は式典で、戦後 75 年たっても米軍基地が沖縄に集中し「県民生活に多大な影響を及ぼしている」と訴えた。安倍首相はビデオメッセージで「政府として基地負担の軽減に向け、一つ一つ確実に結果を出す」と話した。県立首里高 3 年の高良朱香音さん（17）は自作の平和の詩「あなたがあの時」を朗読した。

沖縄戦犠牲者らの名前が刻まれた「平和の礎（いしじ）」の前では時折、雷鳴混じりの雨が降る中、遺族らが碑に刻まれた犠牲者の名を指先でなで静かに手を合わせた。

那覇市の赤嶺清光さん（81）は沖縄戦で姉を失った。沖縄本島の北部で壕（ごう）に逃げる途中、米軍の艦砲射撃に遭った。当時 6 歳だった赤嶺さんは姉の頭に砲弾の破片が当たったのを鮮明に覚えている。別の場所で亡くなった父と姉の名が刻まれた礎の前で「平和な時代だからこそ、戦争の体験を伝えたい」と思いを新たにした。

那覇市の儀武徹明さん（78）は 2 歳の孫を含む家族 9 人で礎を訪れた。沖縄戦で親族を失い「孫に戦争で亡くなった先祖を知ってほしかった」。自身はパラオ生まれで父は南洋で戦死した。戦後 75 年がたち「体験者がどんどんいなくなる。戦争を風化させてはいけない」と語気を強めた。

「おかげさまで平和に暮らしています」。宜野湾市の 60 代女性は沖縄戦で死んだ姉に報告した。当時 2 歳の姉は銃弾が貫通し即死だった。生き残った母から「住民は逃げ回り、壕に行ったら日本軍に追い出された」と聞かされた。「犠牲になった人がいるから今の私がある。あんな悲しい出来事は二度とあってほしくない」と願った。

糸満市の「ひめゆりの塔」では、沖縄戦で旧日本軍に動員された「ひめゆり学徒隊」の慰霊祭が営まれた。教師 13 人を含む 136 人が犠牲になり、例年数百人が参列するが、新型コロナウイルスの影響で遺族への呼び掛けは見送った。

隣接する「ひめゆり平和祈念資料館」の関係者ら約 20 人が参列。戦時下の卒業式で歌おうと練習していた「別れの曲」や校歌を声を震わせながら歌った。元学徒で前館長の島袋淑子さん（92）は「亡くなった友達や先生の顔が浮かんできた。戦争がなければ、みんな元気に生きることができただろうに」と涙を拭った。

命救った下士官の言葉 捕虜になった元通信隊員

日経新聞 2020/6/23 18:18

命を救ってくれたのは、若い下士官の言葉だった。「日本再建の

ため生き残れ」。太平洋戦争末期の沖縄戦で米軍の進撃が迫る中、陸軍通信隊員だった安里祥徳さん（90）=沖縄県北中城村=は、捕虜になってでも生き抜くよう説得された。国のために命をささげる覚悟だったが「戦争はとんでもない悪だった。子どもたちに同じ思いをさせたくない」と痛感する。



沖縄戦の体験を語る元陸軍通信隊員の安里祥徳

さん（5 月、沖縄県北中城村）=共同

県立第一中学校（現在の首里高校）2 年生だった 1945 年 3 月末、通信隊に入隊。司令部と伊江島守備隊との交信のため、首里城近くの壕（ごう）で歯を食いしばりながら重い発電機を回した。米軍機の機銃掃射をかわしながら走り、司令部に受信電文を届けた。海岸を埋め尽くした灰色の米軍艦が次々に発砲するのが高台から見え、破裂音が響いていた。

伊江島が陥落すると通信業務はなくなり、5 月下旬の夜、本島南部の糸満市摩文仁に撤退。夜が明け、転がる無数の死体が目に入った。「踏まないでくれ」と叫ぶ負傷兵や、四つんばいで進む住民たち。生き地獄のような光景だった。

米軍が進攻した 6 月下旬、解散命令が出た。「前線を突破し、北部の部隊に合流するぞ」。友人 2 人と海岸で話していると、近寄ってきた若い下士官が「捕虜の虐待を禁じた国際協定がある。心配せず捕虜になれ」と促す。敵に捕まったら自決せよ、との教育を受けてきただけに、驚いた。

「現役兵は死んで当たり前。俺は敵地に切り込みに行く。日本の復興には若者の力が必要だ。決して死ぬんじゃないぞ」。そう言い残し、下士官は立ち去った。

翌日、友人と一緒に手を上げて岩陰から出て行き、捕虜になった。収容所で、同級生が米兵に銃を向けられ、手りゅう弾で自決したと聞いた。彼に手りゅう弾を渡した日本兵は捕虜になって助かったと知り、悔しさが込み上げた。あれから 75 年。命の重みをかみしめながら次世代に訴え掛ける。「平和をどう守り抜いていくか、考えてほしい」[共同]

名前なぞり「また来たよ」 マスク姿、雨空に孫たちと

日経新聞 2020/6/23 12:38

「また来たよ」。沖縄県糸満市の平和祈念公園では、遺族が石碑「平和の礎」に刻まれた沖縄戦の犠牲者らの名を指先でなで涙を浮かべた。雨と雷鳴に見舞われたが、孫とともに「繰り返さない」と誓う高齢者も。新型コロナウイルスの影響でマスク姿も目立った。



「平和の礎」を訪れ、写真を手に沖縄戦

犠牲者の氏名を見つめる遺族（23日午前、沖縄県糸満市の平和祈念公園）=共同

「子どもたち、孫たち成長しているよ。戦争のないようにしたいね」。宜野湾市の知念康子さん（82）は家族15人ほどで、父や祖父母の名に手を合わせた。戦時中に防衛隊員だった父は、本島で米軍の攻撃を受け亡くなった。知念さんら家族は、本島北部の山中を逃げ惑った。孫で高校1年の宮城愛花さん（15）は「おばあちゃんが耐え抜いたから今の私たちがいる」と感謝を口にした。身元不明者の遺骨が納められた糸満市の「魂魄の塔」。家族3人で訪れた豊見城市の比嘉徹さん（76）は当時1歳で父が犠牲になった。「墓には遺骨の代わりに石を入れた。記憶はないが、生きていたらどんなおやじだったかと思うと悔しい」。立ちこめる線香の煙の中、ビールや黒糖を供え、そっと手を合わせた。平和の礎には今年新たに30人が追加刻銘され、刻銘者は計24万1593人となった。〔共同〕

沖縄戦「慰霊の日」戦没者追悼 戦後75年、コロナで式典縮小 産経新聞 2020.6.23 12:39

沖縄県は23日、先の大戦末期の沖縄戦で亡くなった犠牲者を追悼する「慰霊の日」を迎えた。最後の激戦地となった糸満市摩文仁（まぶに）の平和祈念公園では正午前から「沖縄全戦没者追悼式」が営まれた。新型コロナウイルス感染防止のため規模は大幅に縮小されたが、それぞれの場所で、戦没者への哀悼の誠がささげられた。

追悼式には例年、県内外から約5千人が参列するが、今年は県内の各遺族会支部代表や各市町村長ら約200人に絞られ、安倍晋三首相の招待も見送られた。正午に1分間の黙祷（もくとう）をした後、玉城デニー知事が「平和宣言」を行い、県内の児童・生徒代表が「平和の詩」を朗読した。続いて安倍首相、広島、長崎両市長らのビデオメッセージが流された。

沖縄戦では、米軍が那覇市の西沖、慶良間（けらま）諸島に上陸した昭和20年3月26日から、牛島満第32軍司令官の自決で組織的戦闘が終結した同年6月23日までに、日米あわせて20万人以上が戦死した。4人に1人の県民が犠牲になったとも伝えられる。平和祈念公園内の石碑「平和の礎」には、6月23日以降も含めすべての戦没者の氏名が敵味方の区別なく刻まれており、今年は30人追加されて総数24万1593人となった。

慰霊の日は、県民だけでなく全国民が戦没者を悼み、恒久平和を誓うのが目的。しかし近年、知事が平和宣言の中に米軍普天間飛行場（宜野湾市）の名護市辺野古移設反対を盛り込むなど反基地運動と絡める傾向が強くなり、慰霊の日の政治利用されていると指摘する声も上がっている。

「沖縄の基地負担軽減に全力」 方法は辺野古移設 首相がビデオメッセージ

2020年6月24日 05時55分

安倍晋三首相は23日の沖縄全戦没者追悼式に寄せたビデオメッセージで、米軍普天間飛行場（沖縄県宜野湾市）の移設に伴う名護市辺野古への新基地建設を念頭に「政府として基地負担軽減に向け、1つ1つ確実に結果を出していく決意だ」と述べた。

沖縄全戦没者追悼式で流された、安倍首相のビデオによるあいさつ＝23日午後、沖縄県糸満市の平和祈念公園で

首相は「沖縄の方々には米軍基地の集中による大きな負担を担っていただいている」と指摘。「引き続き『できることはすべて行う』との方針の下、沖縄の基地負担軽減に全力を尽くしていく」と述べた。

普天間飛行場の辺野古移設を巡っては、今月7日の県議選で反対する勢力が過半数を確保している。菅義偉官房長官は23日の記者会見で、沖縄の民意にどう寄り添うかを問われ「地元のご理解を得る努力を続けながら、普天間飛行場の1日も早い全面的な返還を実現する」と述べるにとどめた。

辺野古の埋め立て海域周辺では軟弱地盤が見つかったことから、完成が当初予定より10年以上遅れ、総事業費は少なくとも2・7倍の9300億円に膨れ上がる。政府は巨額の追加コストが判明した地上配備型迎撃システム「イージス・アショア」の配備停止を決めたが、辺野古の新基地建設は推進する姿勢を崩していない。（上野実輝彦）

しんぶん赤旗 2020年6月24日（水）

沖縄戦終結75年 県が追悼式 平和希求の心 発信 知事 “新基地造らせぬ”

太平洋戦争末期の悲惨な地上戦で20万人を超える尊い命が失われた沖縄戦から今年で75年一。「慰霊の日」の23日、沖縄県糸満市摩文仁（まぶに）の平和祈念公園で県主催の「沖縄全戦没者追悼式」が開かれ、参加者らは基地のない沖縄と平和を求める強い思いを新たにしました。



（写真）学校の同級生たちと一緒に献花し、手を合わせる遺族の女性（右端）＝23日、沖縄県糸満市

今年は新型コロナウイルス感染症対策として、式典の規模を例年の5千人から大幅に縮小し、161人の参加となりました。

平和宣言で玉城デニー知事は、安倍政権が県民の民意に背いて米軍新基地建設を強行する同県名護市辺野古の海を含む沖縄の自然は、「ウチナーンチュ（沖縄の人々）のかけがえのない財産だ」と強調。新基地を造らせなくて豊かな自然を後世に残していく立場を改めて示しました。

「沖縄戦で得た教訓を正しく次世代に伝え、平和を希求する『沖縄のこころ・チムグクル』を世界に発信し、共有すること」を呼びかけ、「今こそ全人類の英知を結集して、核兵器の廃絶、戦争の放棄、恒久平和の確立のため総力を挙げてまい進しなければならない」と訴えました。

75年の節目として、松井一実広島市長と田上富久長崎市長、中満泉国連事務次長・軍縮担当上級代表がビデオメッセージで、連帯の言葉を寄せました。

安倍晋三首相もビデオメッセージ。沖縄の米軍基地の集中と大きな負担は「到底是認できるものではない」としながら、同新基地建設や米軍普天間基地（同県宜野湾市）の危険性除去・返還に

は言及しませんでした。

県立首里高校3年の高良朱香音（たからあかね）さん（17）が「平和の詩」を朗読しました。

日本共産党の赤嶺政賢衆院議員や党県議らも参列しました。

沖縄戦から75年「慰霊の日」規模大幅縮小し戦没者追悼式

NHK6月23日 12時53分



20万人を超える人が亡くなった沖縄戦から75年。沖縄は23日、「慰霊の日」を迎え、最後の激戦地となった糸満市では、新型コロナウイルスの影響で規模を大幅に縮小して戦没者追悼式が開かれました。



75年前の沖縄戦では、住民を巻き込んだ激しい地上戦で20万人を超える人が犠牲になり、沖縄県民の4人に1人が命を落としました。

沖縄県は、旧日本軍の組織的な戦闘が終わったとされる6月23日を「慰霊の日」としています。



最後の激戦地となった糸満市摩文仁の平和祈念公園では、沖縄県主催の戦没者追悼式が開かれました。

ことしは、新型コロナウイルスの影響で県外からの来賓や一般の県民の参列は見送られ、これまで5000人規模だった参列者は県内の招待者160人余りとなり、正午に1分間の黙とうをささげました。

式の中で、沖縄県の玉城知事は「平和宣言」を読み上げ、「私たちは戦争を風化させないための道のりを真摯（しんし）に探り、この島が平和交流の拠点となるべく国際平和の実現に貢献する役割を果たしていくために全身全霊で取り組んでいく」と述べました。

そして、アメリカ軍普天間基地の移設をめぐり、沖縄県が反対する中で政府が名護市辺野古の沖合で埋め立てを進めていることを踏まえ、「自然豊かな海や森を次の世代に残していくために、今を生きるわれわれ世代が未来を見据え、責任を持って考えることが重要だ」と述べました。

このあと安倍総理大臣は、ビデオメッセージで「基地が集中する現状は、到底是認できるものではない。引き続き沖縄の基地負担軽減に全力を尽くしていく」と述べました。

また、75年の節目として、原爆による被害を受けた広島と長崎の両市長がそれぞれビデオメッセージを寄せ、恒久平和の実現に

向けて連携して取り組みを進めていくことを呼びかけました。

安倍首相のビデオメッセージ



安倍総理大臣は、沖縄県糸満市で行われた戦没者追悼式にビデオメッセージを寄せ、戦争の惨禍を二度と繰り返さず、平和で希望に満ちあふれる世の中の実現に向け、不断の努力を重ねるとしたうえで、基地負担の軽減に引き続き、取り組む考えを強調しました。

20万人を超える人が犠牲となった沖縄戦から75年となる「慰霊の日」の23日、沖縄県糸満市で戦没者追悼式が行われましたが、新型コロナウイルスの影響で、県外からの来賓の参列が見送られたことから、安倍総理大臣は、ビデオメッセージを寄せました。この中で、安倍総理大臣は、「私たちが享受している平和と繁栄は、沖縄の方々の筆舌に尽くしがたい苦しみ、苦難の歴史のうえにあることを決して忘れない。戦争の惨禍を二度と繰り返さないという誓いを貫き、平和で希望に満ちあふれる世の中を実現する。そのことに今後も不断の努力を重ねていく」と述べました。

そのうえで、「沖縄の方々には、永きにわたり、米軍基地の集中による大きな負担を担っていただいております。この現状は、到底是認できるものではない。基地負担の軽減に向け、一つ一つ確実に、結果を出していく決意だ」と強調しました。

そして、「美しい自然に恵まれ、アジアの玄関口に位置する沖縄の優位性と潜在力は計り知れない。新型コロナウイルス感染症による危機を乗り越え、沖縄の振興をしっかりと前に進めていく。また、首里城の復元も政府一丸となって全力で取り組む」と述べました。

沖縄戦75年「慰霊の日」朝早くから遺族などが平和への祈り

NHK2020年6月23日 7時42分



沖縄は23日、20万人を超える人が亡くなった沖縄戦から75年の「慰霊の日」を迎えました。新型コロナウイルスの影響で例年どおりの追悼が難しい状況ですが、最後の激戦地となった糸満市の平和祈念公園には、朝早くから遺族などが訪れ、戦没者を悼み、平和への祈りをささげています。



75年前の沖縄戦では、住民を巻き込んだ激しい地上戦で20万人を超える人が犠牲になり、沖縄県民の4人に1人が命を落としました。

沖縄県は旧日本軍の組織的な戦闘が終わったとされる6月23日

を「慰霊の日」としています。

最後の激戦地となった糸満市摩文仁の平和祈念公園には、朝早くから遺族などが訪れ、戦没者の名前が刻まれた「平和の礎（いしじ）」の前で花を手向けたり、手を合わせたりしています。

祖父とおじを沖縄戦で亡くした豊見城市の65歳の男性は、「2人はどこで亡くなったのかも分かりません。両親も教えてくれませんでした。慰霊の日は子や孫に引き継いで、過去のことを忘れないためにも大切なことだと思う」と話していました。

平和祈念公園では、正午前から戦没者追悼式が予定されていますが、ことは新型コロナウイルスの影響で、これまで5000人規模だった参列者を200人程度に減らして行われます。

県内各地ではこれまでに慰霊祭や平和学習が中止になるケースもあり、例年にも増して戦争の記憶の継承が難しい状況となっています。

一方、戦後造られた在日アメリカ軍の専用施設のおよそ7割が今も沖縄に集中しているうえ、アメリカ軍普天間基地の名護市辺野古への移設をめぐる政府と移設に反対する沖縄県の対立は続いたまま、埋め立てが進められています。

沖縄戦から75年のことしの「慰霊の日」は平和への誓いを新たにする一方、沖縄の重い基地負担を問いただす日でもあります。

戦争遺跡の5分の1で現存が確認できず

75年前の沖縄戦で住民が避難したガマと呼ばれる洞窟や旧日本軍によって造られた壕などの戦争遺跡のおよそ5分の1で、現存が確認できないことがわかりました。専門家は「文化財指定を含めて保存・活用の議論を進めるべきだ」としています。

沖縄県内には各地に沖縄戦の激しい地上戦の痕跡をとどめる戦争遺跡、戦跡があります。

NHKが今月、沖縄県内の41全市町村に聞き取り取材をしたところ、県内で少なくとも1563の戦跡があり、このうちおよそ5分の1にあたる296の現存が確認できなくなっていることがわかりました。

現存が確認できなくなったものでは、宅地造成や道路建設などでやむなく壊されたり埋没したりしたほか、過去に戦争体験者が存在について証言したものの今は不明になっているケースがあるということです。

また、複数の自治体は「最近、調査をしていないためわからない」などと回答し、現存が確認できない戦跡はさらに多くなるものとみられます。

沖縄の戦跡に詳しい沖縄国際大学元教授の吉浜忍さんは、「沖縄戦の記憶を継承するために過去に調査した戦跡が現在、どうなっているのか改めて調べ、大切な戦跡は保存・活用に向け、行政による文化財指定を含めて議論しなければならぬ」と話していました。

沖縄戦の記憶 体験者から継承難しく

沖縄県内の高校生を対象にした平和教育に関するアンケート調査で、「家族や親族で沖縄戦について話してくれる人がいるか」との問いに、「いない」と回答したのが52.2%となりました。10年前と比べ17ポイント以上も増えていて、体験者からの戦争の記憶の継承が年々、難しくなっている現状が浮き彫りとなりました。

このアンケート調査は、歴史の教師などで作るグループが25

年前から5年に1度行っていて、今回は去年11月からことし3月にかけて沖縄県内の高校2年生1653人から回答を得ました。その結果、沖縄戦を学ぶことについて、95.5%の生徒が「とても大切」あるいは「大切なことである」と回答し、調査開始以降、最も多くなりました。

一方、「家族や親族で沖縄戦について話してくれる人がいるか」との問いに「いない」と回答したのが52.2%、「いる」と回答したのが30.3%となりました。

この質問が初めて行われた10年前と比べ、「いない」は17ポイント以上増えて、「いる」が10ポイント以上減る結果となり、高齢化が進んで戦争の語り部が少なくなっている現状がわかります。

アンケート調査を行った沖縄歴史教育研究会は、「沖縄戦の記憶の継承が家庭でできなくなっているのはやむをえない事実だ。追体験ができる地域の戦争遺跡を活用しながら、いま健在の体験者とともに、悲惨な沖縄戦の実相を伝えていく方法を考えていかなければいけない」としています。

慰霊の日、県内の動き

琉球新報 2020年6月24日 05:30



魂魄の塔の前で手を合わせる家族連れ＝2

3日午前10時すぎ、糸満市糸洲

慰霊の日の沖縄県内の主な動きとその時間は次の通り。

04・57 陸上自衛隊第15旅団の佐藤真旅団長ら約30人が糸満市摩文仁の黎明之塔を参拝。

08・40 糸満市摩文仁の韓国人慰霊塔に在日本大韓国民団沖縄地方本部の南成珍議長ら3人が献花し、手を合わせる。

09・25 本島南部に豪雨が降り、糸満市摩文仁の平和の礎では傘を差しながら祈りをささげる遺族らの姿も見られる。

10・15 ごろ 雨が止み、平和の礎を訪れる人が増えてくる。

10・46 那覇市識名の南洋群島戦没者慰霊碑前では、南洋群島帰還者会の上運天賢盛会長が午前11時の慰霊式典の前にハーモニカで「ふるさと」や「ていんさぐぬ花」などを演奏。「少しでも皆さんの心が慰められたらね」

10・50 新型コロナウイルスの影響で式典が中止となった糸満市山城の開南健児之塔に遺族の70代男性が1人で訪れる。「今年は寂しいね。また来年会おう」と塔に手を振る。

11・00 国立戦没者墓苑で県主催の拝礼式が行われ、玉城デニー知事と吉住啓作沖縄総合事務局長が献花。

11・25 ひめゆりの塔前で焼香が始まる。同級生は塔に向かって手を合わせ、小さな声で語り掛けた。ひめゆり平和祈念資料館の元館長、島袋淑子さんは涙を流し、手で顔を覆う。

12・00 県内各地で黙とう。

12・17 糸満市真栄里の白梅之塔で白梅同窓会の関係者が黙とう。ことは自主参加となり、約20人が参加。中山きく会長は「この場に立つと命どう宝、平和への思いを強くする」と話す。

12・30 県主催の沖縄全戦没者追悼式に安倍晋三首相がビデオメッセージを送る。会場では拍手やヤジはなし。

12・51 沖縄全戦没者追悼式が終わり、再び雨が降る。

13・00 糸満市米須の梯梧之塔に集まった昭和高等女学校同窓生らが焼香を始める。同窓生の娘は「年々、人（体験者）が少なくなる。語り継ぐ責任を強く感じる」と話す。

糸満市摩文仁の島守の塔でも慰霊祭が行われる。規模を縮小し、玉城デニー知事や遺族ら 11 人が参加し献花。

【全文】平和宣言 玉城デニー知事（2020 年慰霊の日）

琉球新報 2020 年 6 月 23 日 12:18



平和宣言を読み上げる玉城デニー知事＝2020

年 6 月 23 日午後 12 時 10 分ごろ、糸満市摩文仁の平和祈念公園

戦争終結 75 年の節目を迎えようとする今日、私たちは、忌まわしい戦争の記憶を風化させない、再び同じ過を繰り返さない、繰り返させないため、沖縄戦で得た教訓を正しく次世代に伝え、平和を希求する「沖縄のこころ・チムグクル」を世界に発信し、共有することを呼びかけます。

戦後、沖縄県民は人権と自治が抑圧された米軍占領下にある中、先人から大切に受け継がれてきた文化を守り、チムグクルを育みながら、復興と発展の道を力強く歩んできました。

しかしながら戦後 75 年を経た現在もなお、国土面積の約 0・6%に米軍専用施設の約 70・3%が集中し、米軍人・軍属等による事件・事故や航空機騒音、PFOS（ピーフォス）による水質汚染等の環境問題は、県民生活に多大な影響を及ぼし続けています。

名護市辺野古で進められている新基地建設の場所である辺野古・大浦湾周辺の海は、絶滅危惧種 262 種を含む 5300 種以上の生物が生息しているホープスポットです。世界自然遺産への登録が待たれるヤンバルの森も生物多様性の宝庫であり、陸と海が連環するこの沖縄の自然体系そのものが私たちウチナーンチュウのかけがえのない財産です。

この自然豊かな海や森を次の世代、またその次の世代に残していくために、今を生きる我々世代が未来を見据え、責任を持って考えることが重要です。

県民の平和を希求する「沖縄のこころ」を世界に発信し、国際平和の創造に貢献することを目的として、2001 年に創設した沖縄平和賞の第 1 回受賞者であるペシャワール会の中村哲医師が、昨年、アフガニスタンで凶弾に倒れるという突然の悲報がありました。中村先生は人の幸せを「三度のご飯が食べられ、家族と一緒に穏やかに暮らせること」と説き、現地の人々が生きるために河を引き、干からびた大地を緑に変え、武器を農具に持ち換える喜びを身をもって示されました。私たちは、中村先生の「非暴力と無私の奉仕」に共鳴し、その姿から人々が平和に生きることとは何かを学ばせていただきました。

しかし、依然として世界では、地域紛争やテロの脅威にさらされている国や地域があり、貧困、飢餓、差別、人権の抑圧、環境の破壊などの構造的な暴力が横行しています。

さらに、全世界で新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、

人々の命と生活が脅かされる未曾有の事態にあり、経済活動にも甚大な影響が生じています。この感染症は、病気への恐れが不安を呼び、その不安が差別や偏見を生み出し、社会を分断させるという怖さを秘めています。

だからこそ、世界中の人々がそれぞれの立場や違いを認め合い、協力し、信頼し合うことにより、心穏やかで真に豊かな生活を送ることができるよう、国連が提唱する SDGs の推進をはじめとした人間の安全保障の実現に向け、国際社会が一体となって取り組んでいくことが今こそ重要ではないでしょうか。

ここ平和祈念公園には、国籍や人種の別なく戦争で亡くなった全ての方々の名前を刻む「平和の礎（いしじ）」があります。礎の前で、刻まれた名前をなぞりながら生きていた証を感じ、いつまでも忘れないとの祈りを寄せる御遺族の姿は、私たちの心に深々（しんしん）と染み入ってきます。

平和の広場の中央には、被爆地広島市の「平和の灯（ともしび）」と長崎市の「誓いの火」から分けていただいた火と、沖縄戦最初の米軍の上陸地である座間味村阿嘉島で採取した火を合わせた「平和の火」がともされております。私たちは、人類史上他に類を見ない惨禍を経験されたヒロシマ・ナガサキと平和を願う心を共有し、人類が二度と「黒い雨」や「鉄の暴風」を経験することがないように、心に「平和の火」をともし、尊い誓いを守り続ける決意を新たにします。

そして今こそ全人類の英知を結集して、核兵器の廃絶、戦争の放棄、恒久平和の確立のため総力をあげてまい進しなければなりません。

此りまでに有て一ならん戦争因に可惜命、失みそ一ちやる人々ぬ魂が穏々とうなみしえ一る如 御祈つし、此りから未来ぬ世ね一 戦争ぬ無らん弥勒世（平和）招ち、御万人ぬ喜びぬ満つち溢んでいぬなみしえ一し心底から念願つし、行ちゆる所存やいび一ん。

（くりまでにいあて一ならんいくさゆゑにあたらぬち、うしなみそ一ちやるかたがためたまし一がなどうなどう一とうなみしえ一るぐとう うにげ一つし、くりからさちじやちぬゆ一ね一 いくさぬね一らんみるくゆ一まにち、うまんちゆぬゆるくびぬみつちあんでいぬなみしえ一ししんてい一からにんぐわんつし、いちゆるうむいやいび一ん）。

I pray that the souls of those who lost their lives in past wars may rest in peace. I will continue to pray for peace and happiness in the future of mankind.

本日、慰霊の日に当たり、犠牲になられた全てのみ霊に心から哀悼の誠を捧げるとともに、私たちは、戦争を風化させないための道のりを真摯に探り、我が国が非核平和国家としての矜持を持ち、世界の人々と手を取り合い、この島が平和交流の拠点となるべく国際平和の実現に貢献する役割を果たしていくために、全身全霊で取り組んでいく決意をここに宣言します。

2020 年 6 月 23 日

沖縄県知事 玉城デニー

（うちなーぐち・英語の訳）

これまでの戦争による犠牲になった人々の魂が安らぎあらんことを祈り、これからの人類の未来には平和と喜びあらんことを祈り続けます。

【特別号】不戦の誓い 次代へ 沖縄戦75年 慰霊の日

琉球新報 2020年6月23日 12:40

沖縄は23日、沖縄戦から75年の節目となる「慰霊の日」を迎えた。最後の激戦地となった糸満市摩文仁の平和祈念公園では同日、沖縄全戦没者追悼式が執り行われる。



ことしの追悼式は新型コロナウイルスの感染対策で規模を縮小し、招待者200人程度が参列する。住民を巻き込んだ悲惨な地上戦で犠牲になった20万人余の戦没者を追悼し、恒久平和を願う。平和祈念公園には早朝から多くの人を訪れ、雨の中、亡くなった家族に思いを寄せ、平和の礎に手を合わせた。

追悼式では玉城デニー知事が平和宣言を読み上げ、平和な世界を構築するため沖縄が果たす役割について決意を表明する。米軍普天間飛行場の名護市辺野古への移設に伴う新基地建設問題に触れ、豊かな自然を次代に残す必要性を訴える。ことしは初めて、国連軍縮担当上級代表の中満泉事務次長、原爆の被害を受けた広島市の松井一実市長と長崎市の田上富久市長がビデオメッセージを寄せる。安倍晋三首相と関係閣僚らは参列せず、首相がビデオメッセージを寄せる。

新型コロナの影響で県内各地の慰霊祭も規模縮小や中止が相次いだ。体験者や遺族らは、それぞれの場所で亡き人を思い、平和への誓いを新たにした。

子に伝える命の尊さ 25年越し、おじ刻銘実現 平和の礎除幕立ち合う 伊敷貴也さん(35)

琉球新報 2020年6月24日 05:00



追加刻銘された平和の礎に、手を合わ

せる(左から2人目から時計回りに)伊敷貴也さんと勝貴ちゃん、環汰ちゃん、こころさん=23日午前、糸満市摩文仁の平和祈念公園

1995年6月23日、当時糸満市立高嶺小5年の伊敷貴也さん(35)＝糸満市＝は平和の礎の除幕に立ち合い、25年後となる今年は親族が追加刻銘された。23日午前、貴也さんは3～8歳の子ども3人と礎を訪れ「礎には日本人だけでなく外国の人々も刻まれていて、みんなが平和を考える場所だ。相手を思いやる気持ちを大切にしてほしい」と優しく見詰めた。

今年刻銘されたのは、貴也さんのおじに当たる「伊敷昭夫」さん。戦時中に父・亀さんらとフィリピンに渡り、5歳ほどで亡くなった。戸籍がなく刻銘されていなかったが、仏壇の位牌(いはい)などの情報を基に、貴也さんが中心となって刻銘を申請した。一緒に申請に取り組んだ伊敷栄さん(67)は昭夫さんのいとこで、貴也さんのおじ。栄さんは「身内にしか供養はできない。刻銘されて良かった」と胸をなで下ろした。すでに刻銘されていた親族2人「伊敷蒲三」「伊敷蒲三の妻」も、ことし「蒲二」「ヤス子」に修正した。

貴也さんは小学生から祖母の戦争体験を聞き取るなどして、家族が直面した歴史に関心を抱き、広島や長崎など国内外の戦跡に足を運んだ。新聞でニュースを読んでは、普段から子どもたちにも75年前の沖縄戦を伝えている。

貴也さんは23日、昭夫さんの刻銘をなぞり「おじいさんのいとこだよ」と子どもたちに説明した。貴也さんは「次の世代に戦争の歴史や平和の尊さを伝えたい。コロナ禍で国同士が批判し合うこともあるが、冷静に判断して考えてほしい」と語った。

戦後75年、米軍の事件事故やまず 危険と隣り合わせ、基地の7割集中

琉球新報 2020年6月23日 11:41



宜野湾市の市街地中心にある米軍普

天間飛行場。オスプレイやヘリ、F35B ステルス戦闘機も駐機する

米軍基地の造成は沖縄戦の最中から始まり、戦後75年がたつ現在も、沖縄には日本にある米軍専用施設の70・3%(1月現在)が集中している。沖縄への過重な基地の集中は、騒音や事件・事故、環境汚染など基地被害を引き起こし、県民は常に危険と隣り合わせの生活を強いられている。

1945年4月、沖縄島に上陸した米軍はニミッツ布告(米国海軍軍政府布告1号)を発し、米国軍政府を設立。南西諸島で日本政府の行政権、司法権を停止した。米軍は日本軍が建設した北飛行場(読谷飛行場)、中飛行場(嘉手納飛行場)を中心に土地を囲い込み、軍用地を確保して本土攻撃の拠点とした。

米軍は住民を収容地区に送り、その間に伊江島などで大規模な滑走路を建設した。普天間飛行場が造られた宜野湾村宜野湾、新城、神山の3集落も、住民が収容地区にいる間にほとんどの土地

が米軍に囲い込まれ、古里に戻った住民は、基地周辺のわずかな土地で再出発を強いられた。

52年4月28日にサンフランシスコ平和条約と日米安全保障条約が発効し、日本は独立したが、沖縄は切り離されて米国の統治下に27年間置かれた。その間、日本本土での反米軍基地運動を理由に沖縄に本土の基地が移転。日本への復帰後、基地返還が進んだ本土と比べると、沖縄の基地負担軽減は進んでいない。

米軍普天間飛行場移設に伴う名護市辺野古の新基地建設を巡っては、各種選挙や県民投票で反対の民意が示されたが、日米両政府は「辺野古が唯一の解決策」と工事を強行している。

戦争歴史示す32軍壕保存を 牛島司令官の孫貞満さん

琉球新報 2020年6月24日 06:00



首里城地下の第32軍壕保存公開の意義について語る第32軍牛島満司令官の孫の牛島貞満さん＝23日、糸満市摩文仁の平和祈念公園

沖縄戦で日本軍を指揮した第32軍牛島満司令官の孫、牛島貞満さん(66)＝東京都＝が23日、糸満市摩文仁の平和の礎を訪れた。那覇市の首里城地下にある第32軍司令部壕の保存公開について「もちろん(保存公開)するべきだ。沖縄戦で多くの住民が亡くなることにつながった南部撤退を決定した場所であり極めて重要だ」と述べた。

32軍壕近くに県立資料館分館を設置し、日本が起こした戦争について触れることも提案した。

牛島さんはかつて都内小学校教諭を務め、祖父の歩みを振り返りながら平和教育に取り組んできた。慰霊の日に合わせてたびたび来県し、平和の礎や魂魄の塔などを訪ねている。

沖縄知事、平和宣言で「辺野古」反対に言及せず 未来への責任を強調

沖縄タイムス 2020年6月24日 04:50

沖縄県の玉城デニー知事は23日の沖縄全戦没者追悼式の平和宣言で、米軍の新基地建設が進む名護市辺野古と大浦湾の周辺の海を「うちなーんちゅ(沖縄人)のかけがえのない財産」と表現し、「次の世代に残すため、われわれ世代が未来を見据え、責任を持って考えることが重要」と述べた。辺野古移設の断念には言及せず、翁長雄志前知事や昨年の自身の平和宣言に比べ、後退したとの指摘がある。



沖縄全戦没者追悼式で平和宣言を読み上げる玉城デニー知事＝23日午後、糸満市摩文仁・平和祈念公園

玉城知事は人権や自治を抑圧された米施政権下でも文化を守り、沖縄の心「チムグクル」を育みながら復興と発展の道を力強く進んできた歴史を評価。一方、米軍基地が集中することで、航

空機騒音や環境問題によって「県民生活に多大な影響を及ぼし続けている」と訴えた。

また、新型コロナウイルス感染症に触れ、「病気への恐れが不安を呼び、差別や偏見を生み出し、社会を分断する」と強調。世界の人々が立場や違いを認め合い、協力し、信頼することが重要と呼び掛けた。

被爆地の広島市長と長崎市長から初めてビデオメッセージが届いたことから「人類が二度と『黒い雨』や『鉄の暴風』を経験することがないよう、心に平和の火をともし、守り続ける」と決意を新たにした。

2001年創設の沖縄平和賞の第1回受賞者で、昨年末にアフガニスタンで凶弾に倒れたペシャワール会の中村哲医師の活動をたたえ、「人々が平和に生きることとは何かを学ばせていただいた」と感謝した。昨年に引き続き、英語としまくとぅばでも平和への思いを込めた。

■玉城デニー知事の平和宣言(全文)

戦争終結75年の節目を迎えようとする今日、私たちは、忌まわしい戦争の記憶を風化させない、再び同じ過ちを繰り返さない、繰り返させないため、沖縄戦で得た教訓を正しく次世代に伝え、平和を希求する「沖縄のこころ・チムグクル」を世界に発信し、共有することを呼びかけます。

戦後、沖縄県民は人権と自治が抑圧された米軍占領下にある中、先人から大切に受け継がれてきた文化を守り、チムグクルを育みながら、復興と発展の道を力強く歩んできました。

しかしながら戦後75年を経た現在もなお、国土面積の約0.6%に米軍専用施設の約70.3%が集中し、米軍人・軍属等による事件・事故や航空機騒音、PFOS(ピーホス)などによる水質汚染等の環境問題は、県民生活に多大な影響を及ぼし続けています。

名護市辺野古で進められている新基地建設の場所である辺野古・大浦湾周辺の海は、絶滅危惧種262種を含む5300種以上の生物が息しているホープスポットです。世界自然遺産への登録が待たれるヤンバルの森も生物多様性の宝庫であり、海と陸が連環するこの沖縄の自然体系そのものが私たちウチナーンチュのかけがえのない財産です。

この自然豊かな海や森を次の世代、またその次の世代に残していくために、今を生きる我々世代が未来を見据え、責任を持って考えることが重要です。

県民の平和を希求する「沖縄のこころ」を世界に発信し、国際平和の創造に貢献することを目的として、2001年に創設した沖縄平和賞の第1回受賞者であるペシャワール会の中村哲医師が、昨年末、アフガニスタンで凶弾に倒れるという突然の悲報がありました。中村先生は人の幸せを「三度のご飯が食べられ、家族と一緒に穏やかに暮らせること」と説き、現地の人々が生きるために河を引き、干からびた大地を緑に変え、武器を農具に持ち換える喜びを身をもって示されました。私たちは、中村先生の「非暴力と無私の奉仕」に共鳴し、その姿から人々が平和に生きることとは何かを学ばせていただきました。

しかし、依然として世界では、地域紛争やテロの脅威にさらされている国や地域があり、貧困、飢餓、差別、人権の抑圧、環境の破壊などの構造的な暴力が横行しています。

さらに、全世界で新型コロナウイルス感染症が猛威を振るい、人々の命と生活が脅かされる未曾有の事態にあり、経済活動にも甚大な影響が生じています。この感染症は、病気への恐れが不安を呼び、その不安が差別や偏見を生み出し、社会を分断させるという怖さを秘めています。

だからこそ命(ぬち) どう宝、生きることへの尊さを、世界中の人々がそれぞれの立場や違いを認め合い、協力し、信頼し合うことにより、心穏やかで真に豊かな生活を送ることができるよう、国連が提唱するSDGs(エスディーゼーズ)の推進をはじめとした人間の安全保障の実現に向け、国際社会が一体となって取り組んでいくことが今こそ重要ではないでしょうか。

ここ平和祈念公園には、国籍や人種の別なく戦争で亡くなった全ての方々の名前を刻む「平和の礎」があります。礎の前で、刻まれた名前をなぞりながら生きていた証しを感じ、いつまでも忘れないとの祈りを寄せる御遺族の姿は、私たちの心に深く染み入ってきます。

平和の広場の中央には、被爆地広島市の「平和の灯」と長崎市の「誓いの火」から分けていただいた火と、沖縄戦最初の米軍の上陸地である座間味村阿嘉島で採取した火を合わせた「平和の火」がともされております。私たちは、人類史上他に類を見ない惨禍を経験されたヒロシマ・ナガサキと平和を願う心を共有し、人類が二度と「黒い雨」や「鉄の暴風」を経験することがないように、心に「平和の火」とともし、尊い誓いを守り続ける決意を新たにします。

そして今こそ全人類の英知を結集して、核兵器の廃絶、戦争の放棄、恒久平和の確立のため総力をあげてまい進しなければなりません。

此(く)りまでいに有(あ)て一ならん戦争(いくさ)因(ゆえ)に可惜(あたら)命(ぬち)、失(うしな)みそ一ちやる人々(かたがた)ぬ魂(たま)が穏々(などうなどう)とうなみしえーる如(ごと)う御祈(うにげ)っし、此(く)りから未来(さちじ)ゃちぬ世(ゆ)ね一戦争(いくさ)ぬ無(ね)らん弥勒(みるく)世(ゆ)ね(平和)招(まに)ち、御万人(うまんちゆ)ぬ喜(ゆるく)びぬ満(みつ)ち溢(あ)んでいぬなみしえーし心底(しんてい)から念願(にんぐわん)っし、行(い)ちゆる所存(うむい)やいびーん。

I pray that the souls of those who lost their lives in past wars may rest in peace. I will continue to pray for peace and happiness in the future of mankind.

本日、慰霊の日に当たり、犠牲になられた全てのみ霊(たま)に心から哀悼の誠を捧(ささ)げるとともに、私たちは、戦争を風化させないための道のりを真摯(しんし)に探り、我が国が非核平和国家としての矜持(きょうじ)を持ち、世界の人々と手を取り合い、この島が平和交流の拠点となるべく国際平和の実現に貢献する役割を果たしていくために、全身全霊で取り組んでいく決意をここに宣言します。

2020年6月23日 沖縄県知事玉城デニー

(しまくとぅばと英語の訳) これまでの戦争による犠牲になった人々の魂が安らぎあらんことを祈り、これからの人類の未来には平和と喜びあらんことを祈り続けます。

「逆へ逃げた」9歳の脳裏に焼き付いた、数え切れぬ人の死 弟の小さな手は決して離さず

沖縄タイムス 2020年6月24日 05:50

[戦後75年の証言 語りつくせぬ記憶] (2)



故金城保善さん



故金城ウシさん



沖縄戦で命を奪われた母ウシ

さんと当時7歳だった弟保善さんの名前が刻まれた「平和の礎」で思いを語る金城保盛さん＝19日、糸満市摩文仁

生き残ったのは、5歳の弟と2人だけ。互いの小さな手を離さぬよう握り合い、逃げ惑う大人たちの後を追うことしかできなかった。無残な遺体、傷つき苦しむ人々を見ても気にする余裕はない。母や弟、祖父の死さえ、「悲しんだのかどうかも覚えていない」。

■凄惨な光景

1945年6月、真壁村真栄平(現沖縄県糸満市)。当時9歳で米軍の銃弾に家族を奪われた金城保盛さん(84)＝南風原町＝は、三男の保信さんと戦火を逃げ惑っていた。凄惨(せいさん)な光景、遺体の臭いなど言葉にできない数々の体験は鮮明に覚えているが、これまで、家族にもほとんど話せていない。

28歳だった母ウシさんは、家族一緒に隠れた大きなガジュマルの根元で保信さんを抱いたまま亡くなっていた。当時7歳の次男保善さんは、4人で潜んだ馬小屋の中で祖父と共に即死。母はすぐそばで、保善さんと祖父は数メートル向かい側に座ったまま、息絶えた。

最初に亡くなった母の妹は埋葬できたが、「母や弟、祖父はそのまま」。子ども2人では、どうにもできなかった。厳しくも子ども思いの母、けんかばかりでも仲良しの弟。戦後すぐ、遺骨を探したが、ガジュマルも馬小屋も跡形も無く、すべて焼け野原になっていた。

■激戦地さまよう

父は徴兵されて、母と3兄弟の家族4人。艦砲射撃が激しくなる前の3月に親戚のいる玉城村船越(現南城市)へ避難していたが、4月下旬か5月からは母の妹とその2歳前後の娘、祖父を含む7人で激戦地へと追い詰められていった。

「知念半島は爆撃しないから向こうへ逃げろという感じの米軍

の宣伝ビラがあったが、日本兵が『1カ所に集めて皆殺しにされる』というから逆へ逃げた」

雨の中、新城から富盛へと逃げた時、150メートルほど前の日本兵2人に艦砲射撃が直撃した。初めて見た人の死。「人の形は残ってるがほとんどバラバラ。水たまりが血に染まった」。壕を見つけても「死体だらけ」で入れず、岩陰など少しでも安全な場所を求め、銃撃の中をさまよった。

母たちを亡くした後も数え切れない死を見た。石に埋もれた状態で座る2人の女学生、ちぎれた足を引きずり戦車に隠れようとする日本兵一。当時9歳の脳裏に、鮮明に焼き付いた。

母たちの遺骨も見つからないまま迎えた戦後75年。「慰霊の日」前に、今年も糸満市の「平和の礎」に刻まれた名前に触れ、「魂魄の塔」に手を合わせた。

「本土側からすれば沖縄は捨て石。よくもあんな惨めな戦争をやらかしたと思うよ」。保盛さんは自宅での取材中、時折目を潤ませても、穏やかな語り口と表情は崩れなかった。ただ、テーブルを指でたたく音が静かに響いていた。(社会部・新垣玲央)

沖縄慰霊の日に陸自隊員20人が参拝 自決した司令官まつる塔「個人の意思」

毎日新聞 2020年6月23日 12時58分(最終更新 6月23日 12時58分)



平和祈念公園内の黎明之塔に手を合わせる

陸上自衛隊の隊員たち＝沖縄県糸満市で2020年6月23日午前4時59分、遠藤孝康撮影

太平洋戦争末期の沖縄戦などの犠牲者を追悼する「沖縄慰霊の日」の23日未明、沖縄県糸満市摩文仁(まぶに)の平和祈念公園にある「黎明(れいめい)之塔」に陸上自衛隊第15旅団(那覇市)の佐藤真旅団長ら隊員約20人が参拝した。塔は沖縄戦で自決した旧日本陸軍第32軍の牛島満司令官と長勇(ちょういさむ)参謀長をまつっている。旅団は「隊員個人の意思で私的に行っている」としている。

塔は摩文仁の丘の高台にあり、牛島司令官らは近くの高台(ごう)で自決したとされる。隊員たちは午前5時前、日の出前の暗闇の中、制服姿でそろって塔を訪れた。佐藤旅団長が無言で花を手向け、手を合わせた。

第15旅団によると、2004年から毎年、隊員の有志が私的に参拝している。県平和委員会などは15日、「旧日本軍を顕彰する政治的行為だ」などとして、第15旅団に参拝の中止を申し入れていた。

隊員らはその後、公園内の国立沖縄戦没者墓苑や当時の島田叡(あきら)知事ら沖縄戦で亡くなった県職員を悼む「島守(しまもり)の塔」などを参拝した。佐藤旅団長は取材に「亡くなった方々にお悔やみを申し上げて来た」と話し、黎明之塔への参拝も「(気持ちは)一緒です」と答えた。【遠藤孝康】